

27年度版教科書つれづれ 5 「動物の体と気候」(東京書籍・小学5年)の巻

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

「動物の体と気候」は東京書籍・小学校5年(上)の説明文である。だいぶ以前は「動物の体」という題名で、全体で22段落あった。そこから、ラクダについて述べている部分8段落をカットしたのが、現行の文章である。

23年度版(以下旧版)と27年度版(以下新版)での文章の違いは、一ヶ所である。2段落で「動物の体の形」としてあったのが、「動物の体形」と変更されたところだけである。そしてもう一つ、ホッキョクギツネの写真が変わっている。旧版の方は茶色い毛も入った写真(おそらく夏のホッキョクギツネ)であるが、新版は全身真っ白の毛もふさふさした写真(冬のホッキョクギツネ)である。

はじめにこの文章の構成について見ておく。

1段落 序論

2～14段落 本論

本論Ⅰ 2～6段落

本論Ⅱ 7～9段落

本論Ⅲ 10～13段落

14段落 結び

*私は「序論、本論、結論」ではなく、あえて「序論、本論、結び」という用語を用いている。

教材文の違いは前述のとおりであるが、学習の手引きには大きな変化が見られる。それは手引きにおいて「序論、本論、結論」という用語が用いられていることである。

旧版の手引きのはじめには、次のように書かれていた。

●文章の構成を考えながら、要旨を読みとりましょう。

新版は、以下のようである。

◆文章の構成を考えながら、要旨をとらえる。

表現に若干の違いはあるが、手引きの基本は変わっていないといえる。ところがその中身を見ていくとかなり異なっている。

新版では次のように述べている。

●文章に書かれている内容を確かめながら、筆者の論の組み立てを考えよう。

▼文章に書かれている内容を手がかりにして、序論、本論、結論の、大きな三つのまとまりに分けましょう。

○序論…これから説明しようとする話題や、説明の観点、問いかけなどを提示する。

○本論…結論へ向けて、話題のくわしい内容や事例を挙げながら述べていく。

○結論…本論を受けて、話題や問いかけに対する答え、筆者の考えなどを述べる。

これを見ても分かるように、「序論、本論、結論」についてくわしく説明している。5年生の最

初の説明文で「序論、本論、結論」という用語をきちんと教えていこうとしている。

旧版では「序論、本論、結論」という用語は、「動物の体と気候」に関わるページでは一度も出てきていない。すべてが「まとめり」という言葉で代用されている。旧版の手引きは次のように書かれている。

◆書かれている内容を考えて、文章の構成をとらえよう

○文章全体の構成を図で表したものを、文章構成図といいます。「動物の体と気候」は、下にしめたように、五つのまとめりからできています。 以下略

序論も、三つに分かれる本論の一つ一つも、結論もすべて「まとめり」という用語を用いて表している。文章構成図自体は、旧版も新版も同じものを用いているのだが、旧版が「まとめり一」「まとめり二」「まとめり三」「まとめり四」「まとめり五」と示されているのに対し、新版は「序論」「本論①」「本論②」「本論③」「結論」と記されている。

加えて旧版は、五年生（下）の「森林のおくりもの」ではじめて「序論、本論、結論」という言葉が出てくるのだが、それ以降六年生までの説明的文章教材において「序論、本論、結論」という用語が使われるものと、使われないものがあるのである。説明的文章の教材において「序論、本論、結論」という用語を子どもたちのものにしていこうとする姿勢が弱いのである。

それに対して新版は五年生のこの後の説明的文章教材でも、六年生においても手引きにおいて「序論、本論、結論」という用語を用いている。この点においても、新版が系統性のある程度意識していることがよくわかる。一步前進として評価したい。

ただ、一つ気になることも述べておきたい。それは要旨に関わってである。すでに見たように、旧版新版ともに「要旨を読みとりましょう」「要旨をとらえる」とあり、この点において変化はない。旧版新版ともに、要旨を「筆者の述べたいことを中心」と説明している。そしてどちらも「要旨は、文章の中にはっきりとめされている場合と、文章全体から読み取らなければならない場合とがあります」と説明している。

さてこの「動物の体と気候」の要旨は、どのようにまとめたらよいのだろうか。「序論、本論、結論」と分けているのだから、結論にあたる 14 段落に要旨をとらえる鍵があるといえよう。14 段落は以下の通りである。

①環境に適応しながら生活を営んでいるのは、これまでに挙げたような動物に限らない。②動物たちの体は、それぞれに、すんでいる場所の気候や風土に合うようにできているのである。③それは、自然が長い年月をかけて作りあげてきた、最高のけっさくであるといえるだろう。

*①②③は加藤が説明のために付した記号

さて、要旨をまとめるとして上記の三つの文のどの文を中心にまとめるだろうか。①文の内容をより明確にしめたのが②文であるから、①文よりは②文の方が要旨にはふさわしい。しかし、「筆者の述べたいことを中心」といわれたら③文ではないかとも言いたくなる。②文だけでまとめるのか、③文だけでよいのか、それとも②文と③文を合わせたものを要旨とするのがよいのか。教師の側でも迷ってしまうのではないだろうか。まして、子どもたちからはもっと多様な意見が出てくるのではないだろうか。「要旨をまとめる」のは意外にむづかしいのである。

これは教科書の責任というよりも、指導要領の責任といえる。「小学校学習指導要領解説国語編」では、要旨という言葉は、内容という言葉といっしょになって、「内容や要旨をとらえる」といった表現で頻出している。そして要旨は次のように定義されている。

要旨は、書き手が文章で取り上げている内容の中心となる事柄、あるいは、それについての書き手の考えの中心となる事柄などである

前述の手引きの説明もここにもその大本があると見てよいだろう。

ここで用いられている「中心」という言葉自体がもともと曖昧な要素を持っていることは、読み研の中ではこれまでも指摘してきた。さらに、「筆者の述べたいことの中心」といった場合、「述べたいこと」は主観的であるのだから、要旨に対する理解が読み手によって大きく分かれてしまう恐れが出てくる。先に述べた②文なのか③文なのかという問題になるのである。

要旨といった時に、筆者が述べたいことではなく、その文章が何について述べていたかを問題にすべきである。筆者が主観的に思っている述べたいことが、文章としてきちんと表現されているとは限らないからである。文章が何について述べていたか、それは文章を検討することで明らかにできるが、筆者の「述べたいこと」は必ずしも文章を検討したからといって、明らかにできるものとは限らない。

「動物の体と気候」であれば、序論で「いろいろな動物たちが、それぞれの環境に適応しながら生きている」と述べていた。本論Ⅰでは、「寒い地方にすんでいるもののほうが、あたたかい地方にすんでいるものにくらべて、体がまるっこく、耳とか手足とかの体の出っ張りの部分が少ないというけい向がみとめられる」ことを述べている。本論Ⅱでは、「寒い地方にすむ動物は、同じ種類の中では、あたたかい地方にすむものにくらべて体格が大きい」ことを述べた。本論Ⅲでは、「毛によって～外気の温度のえいきょうを直接受けないようになっている」ことが述べられていた。いずれも動物の体と気候との関わりであった。そのように見てくれば14段落②文「動物たちの体は、それぞれに、すんでいる場所の気候や風土に合うようにできているのである。」がこの文章で述べられてきたことのまとめとしてふさわしいといえよう。

要旨とは、その文章において主として述べられていたことをまとめればよい。②文そのままでもよいだろうし、短くするのであれば、要旨は次のようにもできる。

動物の体は、すんでいる場所の気候や風土に合うようにできている。

要旨という用語を子どもたちにもっとわかりやすく、混乱のないようにしていくことが求められる。

最後に一つ、注文を付けておきたい。「動物の体と気候」では、寒い地方に住むホッキョクギツネと暑い砂漠に住むフェネックが対比的に述べられている。フェネックは文中で「イヌ科の動物」と説明されているが、ホッキョクギツネには特にそのような説明はない。そのためうっかりすると、ギツネとイヌ科の動物を比べているように、別の種類の動物を比べているかのように読まれかねない。

だが、ギツネは「イヌ科」の動物なのである。ホッキョクギツネもフェネックも「イヌ科ギツネ属」の動物である。つまり同じ種類の動物で比べているのである。だから、せめてホッキョクギツネのところに「ギツネはイヌ科の動物」とでも脚注を入れておいてほしい。そうすることで、同じギツネの仲間と比べていることが、はっきりと子どもたちにも理解される。